

令和5年度 学校評価書

令和5年3月1日

福生市教育委員会 殿

福生市立福生第五小学校

校長 泉田 巧人 印

1 今年度（令和5年度）の学校の重点的な取り組み

（1）学力向上のために

- ①全ての児童が「できた・分かった」が実感できるようユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりや外部人材の活用による具体的など組織的に授業研究を進めた。
- ②タブレットの活用等により福生市学力学習状況調査の分析を生かした学習方法の個別最適化やアウトプットの充実を図った。

（2）豊かな心の育成

- ①人権教育を柱として道徳科を要に、教育活動全体を通じて、心に響く道徳教育を推進するとともに全ての学年・学級で人権擁護委員を講師として招聘し授業を行った。
- ②児童に寄り添い温かく励ましながら、ふっさ五スタンダードを活用し、具体的に指導することで規範意識、責任感を育てられるように工夫した。

（3）健康でねばり強い子の育成、

- ①生活リズムや生活習慣、に配慮した健康増進を支援した。
- ②体力調査結果に基づく、「体力向上推進計画」により、体育的な行事を充実させ体力の向上を図った。

2 自己評価の総括

（1）学力向上のために

- ①児童アンケートの結果では、「学習を理解できていますか」の項目の肯定的な回答は低学年85%、高学年88%であった。また、「授業や話は分かりやすいですか」の項目の肯定的な回答は、低学年90%、高学年88%であった。「ユニバーサルデザインの視点」「一人一台タブレットの活用」「特別支援教育の視点」を生かした授業づくりが児童の学習の分かりやすさに結び付き数値に表れていると考える。しかし、「振り返りや評価」については今後も継続して研究・実践を積み重ねたい。
- ②一人一台タブレット型パソコンの活用が進み、意見の共有、メモとして活用、観察結果の保存や調べ学習、データ処理、プレゼン資料作成等に多様な取り組みが行われている。

（2）豊かな心の育成

- ①校長の講話や学校だより等において複数回「いじめ」について取り上げるとともに、「いじめ防止サミット」を活用して児童にいじめについて考えさせるなど、いじめの未然防止

に取り組んだ。各学級においても、学級活動や道徳科で「いじめ」を取り上げ、指導を行った。その結果、児童からの「いじめ」という感覚が芽生え始め、学校で起きている些細な事でも児童が教員に相談にすることが増えた。

- ②道徳科では、全ての学年・学級に人権擁護委員を講師として招聘し、人との関わりや、他の人を大切にすることを学んだ。また、カリキュラムマネジメントにより、道徳科の授業に安全教育に関わる内容項目を取り上げた題材を使用して授業を行った。
- ③安全教育推進校の授業において、「自助」「共助」から命の大切さや他者への思いやり等について深く考えられた。
- ④1年を通して週1回の朝礼を生かし「思いやり」「感謝」「決まり」など児童の日常生活に直結する講話を行い、自分事として捉えられるようにした。
- ⑤特別活動において学級会やSSTのレクリエーションを重視し、コミュニケーションの能力の向上を図った。また、全ての教員に授業や学校生活で、児童を褒めることや正しい行動へ意識的に注目するようにさせたことで、学級経営が安定し、児童の自己肯定感が向上して、落ち着きが見られるようになった。

(3) 健康でねばり強い子の育成

- ①生活リズムや生活習慣に関して、養護教諭、各担任、保護者との連携を図った。
- ②体力向上の取組を進めた。アルティメット教室は児童が意欲的に運動する機会となり、主体的に授業に参加する姿が見られた。
- ③縄跳び月間や持久走大会など体育的活動を充実させ、児童が楽しみながら体力の向上を図ることができるようにした。

3 自己評価に対する改善策

(1) 学力向上のために

指導法やICT等授業に関わるOJTを充実させることにより、各教員の資質・能力の向上を図る。また、管理職による授業観察を行い、指導・助言をすることで更に授業改善を図る。

(2) 豊かな心の育成

学級活動の学級会を意図的、計画的に行い、実現したい学級や友達との関係などを児童が主体となって話し合わせることで、思いやりのある行動をとれる児童を増やし、支持的風土のある学級にする。

発達支持的な生活指導の理解し、学校生活全般において児童の行動や係活動、当番活動など、「やさしいね」「ありがとう」「たすかるよ」等、担任の褒める、認めるなど肯定的な言葉掛けや指導・支援により、児童同士の思いやりのある行動を強化していく。どの児童も自分の優しい心を素直に行動に移せるよう、指示的風土の有る学級づくりを推奨するとともに、自尊感情、自己肯定感を育む肯定的な言葉声掛けを充実させる。

安全教育推進校の研究を生かし、自他の命を大切にすることを指導を充実させる。

(3) 健康でねばり強い子の育成

本校にはそれぞれ理由があつての不登校や怠学気味の児童が数名在籍し、増加傾向にある。SCやSSW、教育相談室、病院等の外部機関とも連携をし、学校復帰に向け児童に応じた登校刺激を行っている。

学校生活における葛藤場面は、児童の心の成長には必要なものであり、学校は生活リズムを整え発達段階に合った脳への刺激があり健康が維持できる体力を身に付ける重要な場である。教員は意図的に児童の実態より少し高いめあてを示し、児童の粘り強さを育てていく。児童に何をめあてとさせるのか、めあてに向かう姿をどう励まし、認めるのか、教員は個々の児童を理解することに加え発達段階をよく理解するよう努める。今後、児童理解や児童への対応の仕方の研修を深めていく。

また、体力に関しては、具体的目標と児童が自然に体を動かし、運動を楽しむ仕掛けを工夫し、体力の向上を図る。

4 学校関係者評価の総括

(1) 本年度の学校評価保護者アンケートの回収が128(家庭配布数238)で回収率は53.7%であった。昨年度より14.7ポイント改善したものの依然として低い結果である。回答方法は、紙面回答とQRコードの回答で行った。回答への煩雑感や学校への関心の低さが考えられる。

(2) 今年度は、肯定的な意見は80%全体的にAの評価が大幅に下がりBの評価が増加した。
(令和4年度比)

①子どもは、学校や学級で好ましい友達関係をつくることができている。【A評価35%－17ポイント、B評価54%＋15ポイント】

②学校は、子どもが健康で安全な生活を送れるよう配慮している。【A評価40%－17ポイント、B評価44%＋8ポイント】

③学校は、子どもに、生命を大切にすする心や、社会のルールを守る態度を育てようとしている。【A評価34%－16ポイント、B評価52%＋19ポイント】

④子どもは、楽しく学校に通っている。【A評価54%－14ポイント、B評価34%＋13ポイント】

⑤保護者が授業や行事を参観する機会を設けている。【A評価70%＋16ポイント、B評価29%－5ポイント】コロナ禍が明けて、制約なく参観する機会が増えたことが評価されたと考える。

今後の教育活動の充実に努めるとともに、保護者への発信する機会の充実に努める人様がある。

(3) コミュニティ・スクール(以下「CS」という)に関するアンケートの結果では、全ての項目で肯定的評価が上がった(令和4年度比)。また、新設された「PTAとの支え合い」についても肯定的な意見が80%であった。CSの認知度が高まってきていると考えられる。

- ①野鳥や自然観察会で、学んだり、体験したりしたことを子どもたちは家庭で話している。
【肯定的評価 93%+4ポイント】
- ②「水・防災訓練」は、GCSと学校が連携して、子供を含めた地域全体での防災意識を高めるために必要である。【肯定的評価 93%で+1ポイント】
- ③学校だよりでGCSの取組を紹介することでGCSの取組について知ることができている。
【肯定的評価 88%+13ポイント】

5 学校関係者評価に対する改善策

(1) 学校評価保護者アンケートの回収率

- ①回収率 80%以上を目標に、リマインドを行い回答への協力を仰ぐとともに、学校への関心を向けられるように学校公開の充実やホームページ等を活用し、情報発信の充実を図っていく。

(2) 保護者アンケートの結果に関連して

- ①今年度は、ほぼ全ての項目のAの評価（そう思う）が大幅に下がった。学校の取組状況を更に発信し教育活動を理解してもらう機会を増やしていく。
- ②学校は、いじめのない学校づくりに取り組んでいる。の項目において、更に人権教育の充実を図り、自分や他の人を大切にする豊かな心の育成を図るとともに、「いじめ」根絶の取組の情報発信を積極的に行っていく。
- ③子どもは、学校や学級で好ましい友達関係をつくることができている。の項目において、各学級で特別活動の学級会を充実させるとともに、SSTを取り入れたレクリエーションを行うことで、コミュニケーションの能力の向上を図り、円滑な人間関係が築けるように
- ④子どもは、楽しく学校に通っている。の項目において、引き続き安全・安心で一人一人を大切にする学校づくりを具体的な手だてを全教員で行い、C、Dの評価を0に近付けるよう努める。
- ⑤子どもは、学習を理解できている。の項目において、一人一台のタブレット型パソコンを最大限に活用するとともに、大型モニターや電子教科書の効果的な活用を行う。ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりを推進し、「できた」「わかった」が実感できる授業改善に取り組みC、Dの評価を5%以下にするよう努める。

(3) CSに関するアンケートの結果に関連して

- ①各学年の授業において、内容によってGCSを要に地域人材と協働し授業を充実させる。
- ②安全教育推進校の研究を生かし、GCS、保護者と協働し効果的な授業を行っていく。
- ③南田園地区で毎年行われている水防災訓練への本校児童の参加や地域人材を招いての第5学年の地域防災に関する学習等を今後も継続する。
- ④愛鳥活動や自然観察会等様々な教育活動を公開し、本校の教育活動の理解を促す。
- ⑤今年度2月に実施する漢字検定は、見守りをGCSに依頼している。この取り組みと教育課程を関連付、学力向上の手だてとして保護者の意識を向けられる取り組みとしていく。

6 総括的な学校評価

- (1) 「確かな学力」の定着は本校の最重要課題である。学級担任は12人中9人が6年目以下の教員である。日常的にベテランが範を示し、若手が学ぶということができない。そのため、校内研修を充実させること、OJTの内容の充実を図ること、教員間で授業を見合いアドバイスし合うこと、OFJTなどに積極的に参加し、資質・能力を伸ばせることなどを組織的に行い育成していく必要がある。また、管理職が、各教室をこまめに回り、特別な支援が必要な児童の対応の仕方や授業改善への指導を行い、教員一人一人の資質・能力の向上を図っていく必要がある。
- (2) 「主体的な学び」を引き出すために、ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりを行い「できた」「分かった」を実感させる。また、めあてを明確に示し本日の到達点の見通しをもたせるとともに、授業の振り返りを重視する。今日の学びを自分の言葉で表現できるか、明日の学びにどんな期待を寄せているのか、等を一人一人の児童に確認させる。それを実現するには、1単位時間の授業のデザインを各教員が意識して考え直さなければならない。
- (3) 学力向上の根底には、学級経営が大きくかわる。教員一人一人が生徒指導力を身に付けるとともに、発達支持的生徒指導を理解し、児童への対応能力を身に付ける必要がある。
- (4) 特別支援教育の知識と児童理解の力を全ての教員が身に付け、学級経営と個別の支援のバランスがとれるよう 教員の研修を促進し、学びや経験・スキルを共有することで、安心・安全・主体的な学びを実現する。
- (5) 特別支援教育校内支援委員会・いじめ防止委員会・不登校対策委員会による、児童の情報を確実に共有し、全ての教員がブレのない一貫した指導ができるようにする。また、外部機関との円滑な連携のもと、児童・家庭への粘り強い支援を行い児童の生きる力を醸成する。
- (6) CSを生かした地域連携により、安全教育（水防訓練への参加・地域防災に関する学び）や環境教育（愛鳥活動・米作り・地域の自然）の体験的、探究的、課題解決的な活動を充実するとともに、学校課題の解決に向けた取り組みを更に充実させる。